

4 専門委員長対談

近年、公認会計士の活躍の場は、監査法人のみではなく上場企業・上場準備企業を含む一般の事業会社に広がってきております。また、官公庁等に勤める公認会計士も非常に増えており、社会から公認会計士に対して大きな期待が寄せられていると言えます。

日本公認会計士協会 組織内会計士協議会では「組織内会計士ネットワーク」を開設しており、同ネットワーク会員向けに様々な施策を行っています。

本日は、この組織内会計士協議会に設置されている専門委員会である、「研修企画専門委員会」、「ネットワーク構築専門委員会」、「地域サポート専門委員会」、「広報専門委員会」の専門委員長及び組織内会計士協議会議長にお集まりいただき、組織内会計士の魅力、組織内会計士協議会の活動内容、組織内会計士の今後の展望等について対談を実施いたしました。

この対談の様態を本項において報告いたします。



組織内会計士協議会議長

清水 敬輔 氏

研修企画専門委員会専門委員長

脇 一郎 氏

ネットワーク構築専門委員会専門委員長

澤田 正憲 氏

地域サポート専門委員会専門委員長

吉田 徹 氏

広報専門委員会専門委員長

阿久津 聖 氏

広報専門委員会副専門委員長

青野 奈々子 氏

青野 それでは、対談を始めて参りたいと思います。本日は、初めての4専門委員長対談ということもありまして、ぜひとも忌憚のないご意見いただければと思います。

1. 組織内会計士の現状と 各専門委員会の取組みについて

青野 それでは、最初のテーマに入りたいと思います。最初のテーマは、『組織内会計士の現状と各専門委員会の取組みについて』です。

まず、清水さんから組織内会計士の現状、企業内での立場等についてご説明をお願いします。

清水 企業などに勤務する公認会計士を「組織内会計士」と呼びますが、日本公認会計士協会の組織内会計士ネットワークには、現在、正会員として約 1,300 人に登録いただいています。監査法人や会計事務所から企業等に転職された方、公認会計士試験に合格して監査法人などを經由せずに企業等を就職先として選択された方、元々会社の中にながら公認会計士の資格を取得された方など職歴は様々です。



各企業での活躍の場も多岐にわたり、経理、財務はもちろん、経営企画、内部統制、IRなど広い分野で活躍をされています。また、官公庁や、大学などの教育機関で力を発揮している方々も少なくありません。

日本公認会計士協会では、平成24年に組織内会計士協議会を設置し、組織内会計士の資質の維持や

向上に貢献し、公認会計士の活動領域を拡大するための活動に取り組んできました。

青野 清水さん、ありがとうございます。それでは、次に各専門委員長に自己紹介いただくとともに、各専門委員会の取組みについてお話しいただきたいと思います。

脇 研修企画専門委員会専門委員長を務めている脇です。私は、1992年に公認会計士二次試験に合格し、大手の監査法人の国際部に入所しました。その後、三次試験に合格後、すぐにヨーロッパ系外資系企業の日本法人にコントローラーとして転職をし、その時に組織内会計士となりました。

その後、約5年程度コントローラーの仕事をヨーロッパ系の会社で従事した後、アメリカ系の会社で約2年程度、ビジネスアナリスト、つまり事業部経理責任者として従事しました。その後、外資系IT企業の日本法人社長に就任し、主に経営全般及び営業に従事、その約5年後に他の公認会計士と共同で、現在の会計・税務コンサルティング会社を立ち上げて約10年が経過しています。

脇 公認会計士協会では会員向けにCPE研修会を実施していますが、従前では監査法人に勤務されている方や独立開業されている方を対象にした研修が非常に多く、組織内会計士にマッチしたものではありませんでした。このような課題を考慮し、研修企画専門委員会では組織内会計士向けの研修会を企画しています。

研修企画専門委員会では、実務的な研修となること、そして、財務・会計に偏らないようにすることを心がけています。

組織内会計士には、財務や会計以外の分野におけるスキルも求められており、例えば、税務、法務、金融、ヒューマンスキルといった多岐にわたる能力を身に付けていく必要があります。そのため、実務的かつ幅広い研

修会を実施しているわけです。

また、我々がこだわっているのは、講師の質です。講師として実績を有している方で、魅力的な講義をしていただけるような方を講師としてできるだけ呼ぶようにしています。



研修企画専門委員会では、組織内会計士協議会、組織内会計士ネットワーク会員に付加価値を与えることができる研修会を実施していこうと考えています。

青野 ありがとうございます。研修企画専門委員会では大変面白いセミナーを多数行っておられますが、その影には、しっかりとした目標や考え方があったということが良くわかりました。

阿久津 広報専門委員会専門委員長を務めている阿久津です。私は、1993年に公認会計士二次試験に合格しましたが、当時ちょうどバブルがはじけた後で、監査法人が就職人数を絞っていたという事情もあり、一般事業会社への就職活動を行っていました。その結果、当時上場しておりましたソニー・ミュージックエンタテインメントに入社しました。つまり、私は、監査法人での勤務経験はなく、事業会社でキャリアを積んできました。その後、ソニー・コンピューターエンタテインメント(現ソニー・インタラクティブエンタテインメント)に出向し、現在は、ソニー・ミュージックアクシスに在籍しています。

この会社は、ソニーミュージックグループ 20 社ほどに

向けてのシェアードサービスを行っています。

阿久津 広報専門委員会では、文字どおり組織内会計士に関する外部・内部両方の広報活動を行っています。まず、内部の広報、つまり、組織内会計士ネットワーク会員に対するの広報として、会員向けのメールマガジンを配布しています。

メールマガジンでは、イベントのお知らせやセミナーの報告等のほか、最近では、専門委員会の委員紹介を週2回配信しています。

また、外部向けの広報としては、組織内会計士ウェブサイトへ、組織内会計士の活躍事例をアップロードしたり、組織内会計士ネットワーク入会の案内を作成する等、組織内会計士の魅力を外部に伝えるためのコンテンツを作成しています。

広報専門委員会で活動が続ける中で、もっとも苦労しているのがコンテンツの確保です。広報専門委員会では引き続き、コンテンツの確保に注力していく予定です。広報専門委員会で活動が続ける中で、もっとも苦労しているのがコンテンツの確保です。広報専門委員会では引き続き、コンテンツの確保に注力していく予定です。



澤田 ネットワーク構築専門委員会の専門委員長を務めている澤田です。私は、1992年に公認会計士二次試験に合格した後、太田昭和監査法人(現:新日本有限責任監査法人)に入社しました。在籍中は、国内企

業の会計監査の仕事に従事し、会計監査の仕事に加えて、IPO 準備の仕事も比較的多く手がけておりました。

IPO 準備の仕事は、クライアントの上場のコンサルティングが主な業務になりますが、その業務を遂行する中で、いつか自分の会社を上場してみたいと考えていました。少しずつその夢が大きくなり、熟慮を重ねた末、2000 年にシプレクス・テクノロジーという金融系の IT ベンチャーに転職しました。

当時のシプレクス・テクノロジーは、社員 40 人ぐらいの会社で IPO に向けての準備を行っており、私は IPO 準備の責任者として入社しました。2002 年にジャスダックに上場しまして、その後、東証 2 部、東証 1 部と順調に成長をしました。私自身も、そのまま会社に在籍しまして、上場企業の CFO として 13 年間キャリアを積みました。最終的には、2013 年にシプレクス・テクノロジーは、MBO を選択しまして、上場廃止をするということになりましたので、そのタイミングで、私は会社を退職しました。同社在職中に、企業規模は 10 倍以上に拡大しており、急成長企業で 13 年間 CFO として従事できたことは大きな財産となっています。

そして、2014 年からは、株式会社サンウッドというジャスダックに上場している新築マンションデベロッパーに転職し、現在は取締役管理本部長として現在に至っています。



澤田 ネットワーク構築専門委員会は、組織内会計士

同士の交流を深めることを目的に、講演会や交流会を企画運営しています。

具体的には、組織内会計士の活躍事例を皆さんにお伝えするための、パネルディスカッションの開催。大人の社会化見学と呼んでいる「他社のオフィスツアー」の開催。あとはいわゆるネットワーキング関係のイベントである新年会やバーベキュー、ゴルフコンペ等を企画開催しています。

さまざまな企画を通じて、話の合う仲間づくりをお手伝いすることを目標としており、組織内会計士同士、同じ志を持った仲間だと思いますので、この仲間同士の交流を深め、本当に強い仲間を作っていくことであると考えています。

青野 ありがとうございます。組織内会計士協議会の魅力の一つがこのネットワーク構築専門委員会の活動であると感じました。澤田さんのお人柄のおかげで、よりネットワークの構築が進んでいるのだと思います。



では、最後に吉田さんよろしくをお願いします。

吉田 地域サポート専門委員会専門委員長を務めている吉田です。現在、株式会社日本総合研究所で経営コンサルタントという肩書で仕事をしております。私は、公認会計士二次試験に 1994 年に合格しました。その当時は、監査法人への就職が厳しかったこともあり、一般企業への就職活動を行い、たまたま縁あって、某信

託銀行に就職しました。そこで、約 5 年間勤務しましたが、最初の3年間は会計とは関係ない、預金集めや融資などの業務を行っていました。異動で、銀行の経理部門に異動して、決算の仕事をやった後、転職を決意し、監査法人に移りました。

監査法人で5年程度勤務し、会計監査を経験した後、某メーカーに転職し内部監査の仕事をしておりました。その後、日本総合研究所に約9年勤めています。



吉田 地域サポート専門委員会は、首都圏以外の地域に在住している組織内会計士の皆さんをサポートすることを目的に活動を行っています。サポートとは、例えば、ネットワーク化を促進することや組織内会計士同士のコミュニケーションの機会を作ることなどです。

組織内会計士ネットワークには、約 1,300 名が加入していますが、そのうち、東京会に所属している方が全体の 60%程度、また、神奈川県会、埼玉会、千葉会所属の方が 20%程度となっており首都圏だけでネットワーク会員全体の約 80%を占めているという状況です。残りの 20%が地域サポート専門委員会の施策のターゲットとなるわけですが、近畿会、京滋会、兵庫会といういわゆる近畿三会で 15%を占めており、東海会で 3.5%を占めているので、首都圏、近畿圏、名古屋圏で 95%を占めているというのが現状です。

残りの 5%のエリアは、組織内会計士の活動があまり活発ではないため、研修企画専門委員会が実施してい

る研修会を収録した DVD をご紹介したり、広報専門委員会の作成する媒体に地域の方に出ていただく、あるいは、ネットワーク構築専門委員会のイベントをご紹介していくというような形で、いわゆる他の専門委員会との橋渡しをするということも大きな役割であると考えています。

2. 組織内会計士の魅力及び 将来性について

青野 次のテーマは、『組織内会計士の魅力及び将来性について』です。

まず、清水さんから、ご自身が組織内会計士となった経緯、それから企業内において会計のプロフェッショナルが果たす役割についてお話しいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

清水 私自身、上場会社の経理部門に所属する組織内会計士ですが、私は大学を卒業して直ぐに現在の会社に入りましたので、監査法人の勤務経験はありません。私のような職歴の人間から見ますと、企業内で会計のプロフェッショナルが力を発揮するには、まず、会社の事業のことを知らねばならないと感じます。

たとえば営業の最前線、工場などの現場、経営企画、人事労務、広報など、会計とは違う仕事の経験ができるのも、企業ならではの、組織内会計士の醍醐味ではないでしょうか。会社全体を俯瞰して経営を考えるようになるためには、会計職場だけでキャリアを積んでも不十分な気がします。企業に身を投じる会計士の皆さんには、会計から離れた職場へ行くチャンスにも喜んでチャレンジをしていただきたいと思います。

一方、会計士を雇用する企業の方も、高い能力を持った会計士人材には、期待をかけて様々な分野に挑戦させてあげて欲しいです。そうあってこそ、組織内会計士は単なる「会計職人」の枠を飛び出して、より経営に近いステージで能力を発揮できる人材になり得ると思います。

青野 清水さん、ありがとうございます。私も監査法人勤務を経て組織内会計士になった方をたくさん存じ上げていますが、現場経験がないために、組織に入って

苦勞される方も多いと伺っています。

澤田 監査法人では、会計の知識はすぐ身につく一方で、ビジネスマンとしての幅広いスキルってなかなか身につかなかったなと思っています。逆に組織内会計士になったことで、経営的なスキルや判断力、ビジネスに対する見識を深めるなど幅広いスキルを身に着けることができ非常によかったのかなと思っています。

阿久津 私もそのように感じます。実際、会社に入ってみると、現場の近さを感じました。例えば、経理の仕事であっても上司から言われるのは、「現場で何が起きているかを、まず自分が確認してこい」と言われました。特に、決算のときに経理だと席に座っているかと思いきや、最初に言われたのは、「年度末のこの日になぜ席に座っているんだ。現場に行って請求書回収してこい」と言われたことを覚えています。



阿久津 組織内会計士になったばかりで苦勞したことを少しお話します。公認会計士試験に合格すると実務補習所に通うわけですが、会社から期待されている部分もあったのか仕事を多く割り振られて、補習所に通うのに苦勞したことを覚えています。

苦勞もありましたが、やはり公認会計士として会社に期待されているからこそ、色々な仕事を任されたことが自分の糧になったと感じています。

澤田 少し視点を変えたお話をしますが、組織内会計士の中にはベンチャー企業に勤務する方も多くいます。

ベンチャー企業で働く魅力は、一から会社をつくる面白さ、そしてその会社を成長させる面白さだと思っています。

私は、監査法人を辞めて、実際にベンチャー企業に入社したわけですが、一番苦労したのは、監査法人のときって、クライアントからは、ある意味、完成した資料しか出てこないんですよね。当然なんだけど。一方でベンチャーに入ると、その資料を作るもう一個手前、そもそもの数字を作るプロセスからやらなければいけないんです。監査法人時代にはその辺りが見えてなくて、よくよく考えたら何も分かっていなかったということをあらためて感じ、勉強不足を痛感しました。逆にそれを克服していったことで、自分自身も成長できたというところはあったと思っています。

加えて、ベンチャー企業の良さは、仕事のスピード感、自由度、裁量の大きさ、だと思っています。監査法人や大企業だと、サラリーマン的な不満がたくさんあると思いますが、そういった不満がない中で働けるというのは、大変素晴らしいことだと思っています。

吉田 先ほどの自己紹介でも申し上げましたが、私は会計士試験に合格後、監査法人ではなく銀行に就職しました。これは、当時、試験勉強で燃え尽きてしまい、会計とは別のフィールドを見てみたいと考えた結果でした。銀行では会計を必要としない営業の仕事をしていましたが、今振り返ってみてとても良い経験ができたと思っています。

それから、魅力という点ですが、私自身何度か転職をしています。公認会計士という資格がなければ、就職氷河期の中、新卒で銀行に入れたかどうか分からないし、その後、メーカーや、今の会社に入れたのもやっぱり公認会計士という資格が良い方向に作用してい

たのではないかと感じています。公認会計士というと監査ができるための資格とお思いの方もいるかもしれませんが、私自身は、どちらかというと資格イコールどこにも行けるチケットであると考えています。

澤田 吉田さんのチケットのお話で思い出しました。僕が、シンプレクス・テクノロジーを上場させたあとに、その企業に留まった理由です。

一つ目の理由は、上場した時に僕、30歳だったのですが、30歳で上場企業の役員として経営に携われるチャンスは、人生で2度ないと感じ、やれるところまでやってみようと感じたからです。若くしてチャンスが巡ってきたのは、やはり公認会計士というチケットがあったからだと思っています。

それからもう一つの理由は、上場するとIR活動をするんですが、IR活動を通じて実際に投資家の方々と会ってみて、初めて誰がどのように有価証券報告書を使っているかを肌で感じる事ができたことです。監査法人にいたときは、有価証券報告書や決算短信をチェックしたりしていたけれど、その利用者である投資家の姿が全然見えていませんでした。自分自身が企業側に回ることで、財務諸表の利用者である投資家がどのような情報を欲していたのかが初めてわかりました。公認会計士が企業側において、投資家が欲している情報を発信していくことが、監査側、企業側、投資家側の全ての世の中の価値向上に繋がるのではないかと感じました。このような仕事をしていきたいと感じたのです。



脇 私は、もともと、組織内会計士を目指したわけではなくて、結果的にそのようになったという形です。当時の私は、グローバルに活動すること、そしてビジネスをすることにとても興味を持っていました。あと、マネジメントがしたいという気持ちも強かったと感じています。もともと私の父が商人なので、その気質を受け継いでいるということもあるかもしれませんが、やはり「儲かるか儲からないか」という仕事をしたいと感じていました。

澤田 儲かるか、儲からないかの仕事ができるのが、組織内会計士の魅力の一つですね。監査法人で頑張っても、会社の収益には直結しないじゃないですか。

脇 そうですね、実地棚卸しなどを行っていても、これをして会社の儲けに繋がるのかな？ と当時は思ってしまったんですね。若気の至りです。やはり商人の血が騒いだのか、もっとビジネスに近いところで仕事をしたいと感じていました。そこで、組織内会計士になりビジネスに直接関わることで「儲かる」近い位置で仕事をすることになったんです。

組織内会計士になってまず感じたのは、基本的に公認会計士というのは世間から見ても全体的に優秀であるということですね。監査法人にいと公認会計士ばかりなので、なかなか気付かないのですが、一般事業会

社には、いろんな方がいて、レベル感もまちまちということもよく分かりました。そこで優秀な公認会計士が監査法人だけにいるのはとてももったいないと感じたんです。例えば、マネジメントとか、ビジネスに近い所で公認会計士はもっと活躍できるのではないかと感じたのです。

青野 脇さん、ありがとうございます。先ほど、吉田さんから、公認会計士の資格を持っているからこそ良い転職ができたというお話がありました。

実は、私も、結婚してから専業主婦になり、子供が幼稚園に入るときに就職活動をしたんですが、なかなか働き口が見つかりませんでした。

その後、公認会計士試験に合格して監査法人に入りました。結局 10 年弱のブランクができ、監査法人では、若い社員と同レベルで働いていましたが、監査法人を退職したとたん、このブランク差がなくなったことを思い出しました。

澤田 吉田さんのおっしゃったチケットですよね。資格がなかったらそういうことになりませんよね。

青野 そう、すごく恩恵を受けたと感じています。

脇 公認会計士って、女性にはすごくいい資格だと私は思いますよ。



吉田 会計というのは、どこの領域でも必要だと思いま

す。最近の社会問題、例えば、環境問題とか、少子高齢化だとかどのような問題を考えるときにも、必ず採算すなわち数字が必要となるわけです。その意味では、公認会計士という資格は、オールマイティーなチケットとなるのではないかと感じています。

組織内公認会計士協議会における問題意識とその対応について

青野 では、最後のテーマに移りたいと思います。最後のテーマは『組織内公認会計士協議会における問題意識とその対応について』ということで、組織内会計士協議会が、組織内会計士に向けた施策を実施するに当たっての問題意識についてお話をいただければと思います。

清水 企業が公認会計士の人材に期待しているのは、「公認会計士」の看板ではなくて、あくまでその能力です。企業の中にも経理部だけとって、その会社生え抜きの優秀な経理部員はたくさんおられます。企業の中で、会計士の資格がないとできない仕事はありません。協議会としては、企業内の一般的な経理人材とは差別化できる、組織内会計士ならではの付加価値を付与したいと考えています。そのために、組織内会計士同士の人脈を構築できる機会を提供したり、組織内会計士が参加できる研修会を開いたり、メールマガジンを配信したり、そういう活動をしていきたいです。そして、組織内会計士の付加価値をさらに高めるために協議会に何のお手伝いができるのか、組織内会計士の皆さんの声を聴いていきたいと考えています。

青野 はい、ありがとうございます。企業や社会へ、公認会計士という資格の有用性がアピールしきれていない現状もあると思います。

澤田 残念ながらまだ日本では、組織内会計士がメジャーではないのは、やっぱり事実だと思います。だから、組織内会計士の価値を、これから僕たちがつくっていくなければならないと思っています。

会計不祥事の観点でいうと、幸いにも公認会計士がCFOを務めている会社で、会計不祥事は今のところ発生していません。これは大変喜ばしいことであり、この評

価を引き続き守っていかないといけないと感じています。投資家から見て、公認会計士がCFOをやっている会社には安心感があるという雰囲気醸成していかねばいけないですが、これは、一朝一夕にできることではありません。長い時間をかけて公認会計士がCFOをやっている会社は信頼できるという評判をつくっていくなくてはいけないと考えています。



また、もう一つ考えているのは、もう少しミクロのレベルの観点で、例えば、投資家であるとか、銀行であるとか、外部のいろんな利害関係者と話すときに、やっぱり数字を経営目線で語れる人っていうのは、世の中に非常に少ないことを実感していて、公認会計士はそれができる人材だと思っています。数字をしっかりと語れる組織内会計士が増えていくことで、公認会計士が企業の中にいてくれないと困ると言ってもらえる状況を作っていくべきだと考えています。

脇 公認会計士の仕事を世間があまり理解していないことが問題だと感じています。もっと言えば、士業の中で一番世間に理解されていない仕事だと感じています。公認会計士という仕事の認知度の向上が課題ですね。



私が、2年ぐらい前に、ローマで開催された世界会計士会議に出席し、様々な方々と話をしてきました。特に組織内会計士に関する課題についても話をしてきました。その中で組織内会計士の先進国と言ってもよい米国の取り組みについて驚かされました。

組織内会計士は米国でもとてもメジャーな存在であり、日本と同様に、キャリアの最初に監査法人や会計事務所に入り、そこから企業に転職する例が多いわけです。この転職に当たっての課題は、日本と一緒に、監査での経験はもちろん役に立ちますが、それだけでは不足している、特に経営管理関係のスキルが不足している。これに対して AICPA(米国公認会計士協会)が自ら、監査法人と企業の間立ち、経営管理スキルに関する資格取得を支援するなどバラエティに富んだ施策を講じて対応しています。

日本の場合は、どうしても監査法人が中心の制度体系となってしまうっており、米国のように監査法人と企業の間立った活動はできていないと感じています。現在、組織内会計士協会で取り組んでいる施策をもっと幅広く展開していく必要があるのではと個人的には思います。

阿久津 社会的な認知度の低さは私も痛感しています。会社側にとって公認会計士が必要だという話を先ほどまでしてきたわけですが、我々の方から会社に対して公認会計士の有用性を知らせていくことが必要かと思っています。

そうすると、会社側は公認会計士の資格を持っている人を欲することとなり、監査法人からの転職者や試験合格者を受け入れることに繋がると考えています。

また、現在、組織内会計士として事業会社に勤務している方々のネットワークも使って、企業への公認会計士への認知度の向上を図っていきたいと考えています。

吉田 地方の組織内会計士のサポートのあり方についてというところですけれども、地域サポート専門委員会での取り組みを通じて感じたことは、その地域にどれだけの組織内会計士がいるのかを確認することが難しいということです。

地域の組織内会計士をサポートするに当たって、大きく三つのステップがあると思っており、まずは、組織内会計士の存在の有無を含めた現状把握、二つ目に状況に合ったサポートをしていくこと、三つ目は継続的に活動できる仕組みを構築することです。この一つ目のステップが非常に難しい状況であると感じています。

冒頭、首都圏、近畿圏、名古屋圏以外の地域には、ネットワーク会員は全体の5%しかいないと話しましたが、地域の方々からは、組織内会計士ネットワークに加入していない人も多くいるという話を伺っています。潜在的には、現状の2倍、3倍ぐらいの組織内会計士が存在しているのではないかと考えています。現状把握をしっかりとやっていきたいと考えています。

また、地域の組織内会計士のサポートに当たって、東京でのやり方をそのまま導入して良いだろうかという点に問題意識を持っています。東京には、組織内会計士が集中して存在しており、研修やイベントを実施しやすい環境にありますが、地域では、組織内会計士がなかなか集まらないといった問題があります。

このようなギャップを埋めるために、我々は、現場に足を運び、その地域の組織内会計士に会って話しを聞いていくということが、地道ではありますが必要であると感じ

ています。

青野 最後に清水さんに本日のまとめをお願いしたいと思います。

清水 世間一般の方々にとって、公認会計士という職業に接する機会は多くありません。特に監査法人などは何をしているか見えにくい組織です。

しかし、組織内会計士が企業などに入り込み、一般的なビジネスパーソンの方々により近いところで高い能力を発揮する様を見せることができれば、公認会計士のブランド力が高まります。それによって公認会計士という資格の認知、評価が高まれば、それがまた企業などから組織内会計士に対する期待を高めることとなります。そういう好循環を生み出せるように、組織内会計士協議会は息の長い取り組みをしていきたいと思えます。

青野 それでは、時間となりましたので、4専門委員長対談を終了します。本日はありがとうございました。

以 上

